

# 第2回札幌市ウォークアブルビジョン 策定検討委員会

## 議 事 録

日 時 令和6年12月10日(火)午前10時00分開催  
場 所 オンライン(事務局:札幌市役所 5F 南東会議室)

## 1. 開会

### ○児玉政策推進課長

それでは若干定刻を過ぎましたけれどもこれより第 2 回札幌市ウォークアブルビジョン策定検討委員会を開始いたします。私は札幌市まちづくり政策局政策推進課長の児玉と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本委員会は北海道外の委員が多数おりますことから、第 1 回検討委員会と同様にオンライン開催といたします。委員の皆様におかれましてはご多忙の中、ご参加いただきまして誠にありがとうございます。また本日は大藪委員につきましては所用につき欠席とのご連絡をいただいております。

なお事務局につきましては、第 1 回検討委員会と同様にまちづくり政策局政策企画部プロジェクト担当部長の山内、都心まちづくり推進室長の稲垣、都市計画部長の長谷川、総合交通計画部長の小林の計 4 名の部長職が参加しております。どうぞよろしくお願いいたします。本委員会は一般の皆様にも公開しておりまして、会議終了後には議事録も公開予定でございます。あらかじめご了承ください。オンラインで視聴されている皆様におかれましては本委員会のご質問やご意見を受け付けることは難しいため、終了後に事務局であります札幌市政策推進課までご連絡いただければと思います。

それでは事務局を代表しまして、札幌市まちづくり政策局政策企画部プロジェクト担当部長の山内よりご挨拶申し上げます。

## 2. 開会挨拶

### ○山内プロジェクト担当部長

札幌市まちづくり政策局プロジェクト担当部長の山内でございます。本日はお忙しいところ第 2 回札幌市ウォークアブルビジョン策定検討委員会にご参加いただきまして誠にありがとうございます。

改めてではございますが、札幌市では、居心地が良く歩きたくなるまち、ウォークアブルシティを推進するため、官民一体となって取り組む際の指針となる(仮称)札幌市ウォークアブルビジョンを来年度、令和 7 年度に策定する予定でございます。この札幌市ウォークアブルビジョンの策定に向けては、今年 7 月に開催した第 1 回検討委員会で、ビジョンの構成案や効果的な手法を検討するための公募型実証実験についてご説明させていただき、委員の皆様から様々なご意見をいただいたところでございます。

本日の第 2 回検討委員会では、大きく二つの議題をご確認、ご議論いただくことを予定しております。一つ目は、8 月から 9 月にかけて実施した三つの公募型実証実験の実施結果と、これに合わせて実施した市民参加型のサッポロウォークアブルプロジェクトの結果を紹介させていただきます。

そしてもう一つが札幌市市役所庁内に設置したプロジェクトチーム、都心、地域交流拠点、それから住宅市街地、この三つそれぞれにおける検討状況とそれから(仮称)札幌市ウォークアブルビジョンの中間骨子案を説明させていただきます。

限られた時間の中ではございますが、皆様、専門的な見地からの忌憚のないご意見をいただければと思います。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

### 3. 議事

#### ○児玉政策推進課長

それでは本日の議事について有村委員長どうぞよろしくお願いいたします。

#### ○有村委員長

それでは、早速、議題に入らせていただきます。まず事務局から資料の説明をお願いいたします。

#### ○事務局 政策推進課 阿部

札幌市まちづくり政策局政策推進課の阿部と申します。

画面共有をさせていただきます。私の方からはまず札幌市資料説明の前半部分といたしまして前回の振り返り、公募型実証実験の実施結果、市民ワークショップ等の開催結果についてご説明いたします。

まず、(仮称)札幌市ウォーカブルビジョン策定の背景でございます。令和 4 年度に策定した札幌市の最上位計画である第二次札幌市まちづくり戦略ビジョンにおける重要施策の一つとしてウォーカブルシティの推進を挙げており、居心地が良く歩きたくなり、多様な活動ができる、滞留したくなる空間の形成に向けて都心、地域交流拠点、住宅市街地、それぞれの特性を生かした空間の整備を進めると明記されております。

次に札幌市におけるウォーカブル推進の意義、目的でございます。国内あるいは世界の都市を見ましても、ウォーカブルシティ推進の意義はそれぞれ異なっております。その中でも札幌市では特にこの 3 点、市民の健康増進、安全・安心な歩行環境、交流・にぎわいの創出の観点から推進する必要があると考えているところです。

そして前回の第 1 回検討委員会では、こちらのビジョン構成案についてご議論をいただいたところでございます。第 1 章では、札幌市におけるウォーカブル推進の意義、目的を整理し、第 2 章で目指す姿を、パースなどを用いて整理可視化し、そして第 3 章では、その目指す姿に近づいていくための効果的な手法や、これらを組み合わせたモデルケースの紹介をし、第 4 章で推進体制や支援策の方向性をお示したいと考えております。

また、ターゲットといたしまして、このビジョンを誰にどのように活用してほしいかというところも明確化することで、より次のアクションに繋がるビジョンを目指してまいりたいと考えております。

こちらの表は本委員会における 2 ヶ年分のスケジュールになってございます。

令和 7 年度末にビジョンの策定公表をするにあたり、来年夏ごろまでには案を固めていく必要があり、令和 6 年度末までに骨子案をまとめていきたいと考えております。第 1 回目  
の委員会では、構成案をご確認いただきましたので今回はここに肉付けをさせていただきます、年度末の骨子案作成に向けた方向性などをご意見いただけますと幸いです。

また第 1 回の委員会で大藪委員から、このビジョンの目指す年度を明確化するべきというご意見をいただきました。そちらにつきましては、上位計画である第二次札幌市まちづく

り戦略ビジョンと合わせまして、令和 13 年度までとしております。

もう一つご意見としてウォークブルビジョン策定後も、ビジョン実現に向けて全市的な戦略を持って進めていくことが重要というご指摘をいただいております。こちらはウォークブルプランとでもいいですか、具体的な事業が紐づいた推進計画の策定を検討しているところです。

ここからは第 1 回の委員会で効果検証手法等についてご意見いただきました、公募型実証実験の結果についてご報告させていただきます。まず改めての概要となりますが、ビジョン策定に向けて地域団体等が主体となったウォークブルなまちづくりの可能性を検証し、効果的な手法や、行政に必要な支援制度を明らかにするために実施したものです。

都心部を除く 17 の地域交流拠点を対象として募集をし、7 件の応募中 3 件を採択し、8 月から 9 月にかけて実証実験を実施いたしました。

まず最初に実施したのが、学生団体マルシェ本舗による「平岸夏祭り」でございます。地下鉄平岸駅から約 400m の位置にある、ほぼ住宅街といっても差し支えないエリアにおいて、生活道路や近隣の公園を活用して実施いたしました。右側の上の写真が通常時で、下が実証実験時ですが、道路上にキッチンカーや滞留スペースを設けたり、公園内には子ども向けの巨大塗り絵などを実施いたしました。実はこれまでも平岸マルシェとして継続的に一部の道路空間を活用していたエリアでしたが今回は活用範囲を大幅に広げ、また公園も活用し、さらに時間帯も夜として盆踊りも実施するというところに新規性がありました。

効果検証は、前回委員の皆様からいただいた健康、安全・安心、交流・にぎわい毎に整理するというご意見のもと、画面左側に整理いたしました。健康の観点では、歩行者数が約 6 倍。また人の 1 日の移動に着目した歩行量比較では、平時に比べて約 2 倍の歩行量となりました。

また安全安心の観点では、道路の歩行者空間化、歩行者天国化や公園利活用により、「従来より子どもが安心して遊ぶことができた」との声が聞かれており、子供の数も実際に約 19 倍に増加しております。交流・にぎわいの観点では、滞在時間が約 23 倍に増加いたしました。普段は通過するだけの空間が、地元民が集まり、平均でも約 50 分も滞在する空間へと変化いたしました。また周辺 10 店舗にアンケートをとったところ、新規のお客さんが増えたという回答が 7 割に及んでおりました。ビデオカメラを用いたアクティビティ調査では、通過のみであった空間が、飲食他には休憩、盆踊りなど公共空間を研究するヤングール氏がいうところの社会活動が多く見られた結果となっております。また前回、委員の皆様より社会的関係性の変化を捉えることが重要というご意見をいただいておりますが、同行者との会話が增えたと回答した方が約 3 割との結果でした。画面右側にその他の効果と今後の課題などを記載しておりますが、学生主体で実施することによる人材育成効果ですとか、今後も継続的に実施する方向性が得られております。

課題といたしましては、初めての公園使用であったということで、管理者協議に時間を要してしまったということがありました。今回得られた効果的な手法については画面右下に整理して記載しております。

次に、宮の沢地区で宮の沢まちづくり協議会が実施した、「コンサふれあい通りのホコテン化プロジェクト」でございます。こちらは周囲を観光施設「白い恋人パーク」やコンサドーレ札幌の練習場そして宮の沢ふれあい公園に囲まれた道路空間を歩行者天国化したものでございます。三つの実証実験の中では最も規模の大きい歩行者天国となりますが、子どもが楽しく歩ける仕掛けや滞留スペース、また道路上でのキックターゲットなどを実施いたしました。今回は単独開催ではなく、宮の沢ふれあい公園で行われた地域のお祭りに合わせて実施したものですので、歩行者交通量などは単独での評価は困難ではありますが、それゆえに多くの方々に体験していただくことができました。

こちらが先ほど同様効果検証結果をまとめたページでございます。健康効果については平岸地区同様に増加傾向が見られましたが、安全・安心の観点では、地域の方々から、「施設間を行き来しやすくとても安全になった」という声が特に多く聞かれました。交流・にぎわいの観点では、平岸地区と概ね同じ傾向ですが、滞在時間は 2 倍程度の伸びにとどまっており、これは周囲を滞在空間に囲まれておりそれぞれ安全に繋ぐ意味合いが強かったということが影響していると考えられます。今回は初めての歩行者天国化でしたが、地域住民からの苦情等もほぼ無く好意的な声が多かったため、来年度以降も継続的に実施していくということで検討を進めております。一方で道路管理者協議には、道路活用の必要性という点について、協議の時間を要してしまったということが課題として挙げられております。また実証実験から得られた効果的な手法は右下に整理しております。

最後は地下鉄真駒内駅前の歩道で実施した「マコエキフェス」です。こちらは昨年度に策定した「真駒内駅前地区まちづくり計画」により将来駅前に歩行者中心の交流広場が整備される予定ですが、その空間活用を地域自らが考えるきっかけとするべく実施されました。マルシェやキッチンカー、ストリートミュージックや紙芝居、さらに可変性のある滞留スペースなどを配置いたしました。ストリートパフォーマンスを実施したのは真駒内地区だけでしたが、座って聞き入る方以外にも、通り過ぎながら指をさしてこちらを気にする方など、より広範囲に効果があることが、現場においてわかりました。

効果検証結果は概ね先ほどの 2 地区と同じ傾向ではありますが、特に安全・安心の観点では、子どもからご高齢の方、さらには障害のある方など様々な方が広場に集まり、思い思いの過ごし方をされている姿ということがとても印象的でした。今回が約 30 年ぶりの広場活用とのことでしたが、実証実験をきっかけに継続的に広場活用したいとの感想をいただいております。そのためには冬の活用に関する課題感も意見として挙げておりました。以上 3 団体の実証実験結果のご説明でした。いずれも短期間かつ小さな実験でしたが、3 団体とも継続実施の意向があることや新たな都市風景を思い出とともに皆さんと共有できた非常に有意義な実証実験でした。

そして、実証実験の終了後には三つの実証実験の実施団体と一般市民、そして行政職員が集まり、成果発表会とワークショップを開催いたしました。今回チャレンジした公共的空間活用を継続発展させていくためにはどのような工夫が必要なのか。また札幌市としての支援制度を検討する上でも貴重なご意見をいただきました。例えば、道路使用占用許可の煩雑さから、ワンストップ窓口の設置ですとか、公共的空間を活用する手引きガイドラインの作成などが挙げられました。またこういった各地域のまち作り団体同士の交流という機会もなかなかないことから、交流の機会があると、より知識の共有や、新たな発想、アイデアの創出に繋がるのではないかとのご意見もいただきました。

先ほどの市民ワークショップ以外にも、サッポロウォーカーブルプロジェクトと題しまして様々な機会を捉えて、市民参加型の計画策定プロセスを導入しております。委員の皆様にもご参加いただきました、6月2日のシンポジウム以降、三つの実証実験の前の夏頃には、市民ワークショップを行い、また各実証実験時においても、一般市民の皆様の参加を促すフィールドワークを実施しております。その中で得られた多くの意見についてその一部をご紹介します。

こちらはあくまで抜粋ですが、例えば、あなたにとって歩いて楽しい街とはというテーマに対しては、水辺や自然を感じられる遊歩道ですとか、テーマが感じられる歩行空間というご意見がございました。次に札幌らしいウォーカーブル空間とはというテーマに対しては、ポロクルのポートがもっと広範囲に設置され、さらに自転車が通行しやすい環境整備ですとか、自然との共生といったことについてのご意見が多くございました。最後に冬でも歩きたくなるまちとはというテーマでは、温まることができる建物との連携ですとか、札幌市民の冬季のネガティブなイメージを払拭し、楽しむことができる体験を作ったりですとか、イルミネーションや焚き火などがあると良いとのご意見をいただきました。

前半部分の資料の説明は以上となります。進行を有村委員長にお返しいたします。

#### ○有村委員長

ありがとうございました。それではただいま事務局より説明がありました、公募型実証実験の実施結果および成果報告会および市民ワークショップの開催結果などにつきまして委員の皆様よりご質問ご意見等はございますでしょうか。

挙手だとわかりづらいので直接話していただいて構いません。林さんどうぞお願いいたします。

#### ○林委員

事務局からの資料のご説明ありがとうございました。非常に充実した内容だったかと思えます。2点ありまして、1点目は、社会実験の部分の効果において、歩行者数が何倍ですとか何十倍ですといった内容があり、数字として表せるのはすごく良いと思いますが、数字が格段に上がっているのは見せ方として良いのかどうか、どちらが良いというわけではないのですが、何か議論する価値はあるなと思いました。2点目は、管理者協議に少し時間がかかったというご説明があったかと思いますが、どのあたりが難しいのかという部分を教えてください。

#### ○有村委員長

はい、ありがとうございます。事務局お答えできますか。

#### ○事務局 政策推進課 阿部

ご質問ありがとうございます。事務局政策推進課の阿部です。管理者協議の部分についてですけれども、時間を要した原因としては、そもそもなぜこのようなことをやるのかという理由の部分ですとか、何を目的にやるのかというところの前提条件を共有する必要があることがまず一つあり、その先には、もちろん既存の札幌市のルールがあるので、それにのっとって現場サイドもやっているということなのですが、現状のルールだと実際問題難しい部分も企画内容にあるというところで、そこについてどう調整するかというところが、少し時間を要したのではないかという印象になっております。

### ○有村委員長

ありがとうございます。1点目のご質問といたしますか、ご意見について何かありますか。私の方から話していいですか。少し気になるところがありまして、林さんのご意見ごもっともかなと思って見ていて、当然定量化したときに、これはある種のイベントですので、平常時と比べるとすごい大きなインパクトが出てくるものだと思います。

それで三つ今回実証実験やっております、平岸と宮の沢に関しては同じような傾向があると思っています。テンポラリーなイベントで、これを継続するとき、新しい公園ですとか道路の使い方を地域が学んでいくということが似ていると思って見ていました。

三つ目の真駒内地区は、駅前再開発案件が同時に出てきて、インフラが変わっていきます。するとテンポラリーなものが、パーマネントに変わっていき、随時賑わいが出てくる場所に変わっていきますので、インフラ整備と合わせたコミュニティを醸成していくような形でこの部分が動いていくのではないかと見ていて、実験は3ヶ所ありますが、インフラ整備との連動の部分がここの実験であると思っています。なので、day-to-dayのこの日々の行動、平日の行動と休日の行動、かつこの休日の中でもある種のイベント、夏の盆踊りですとか、活動の頻度の中で、それぞれバラけて三つあると考えています。ここで議事の後半でも出てくると思いますが、歩きたくなるまち作りは、それは我々の日常の行動の中でのまち作りなのか、そうではなく新しい繋がり、社会的な紐帯といたしますか、コミュニティを作っていくようなところでの効果なのかということ、ある程度分布を見ながら、議論していかなければいけないと思いながら林さんの最初のご意見を聞いておりました。以上です。

### ○林委員

ありがとうございます。

### ○有村委員長

ご意見ご質問等ございますでしょうか。

### ○山崎委員

山崎です。よろしいでしょうか。今の点に重ねて、まずご説明ありがとうございます。私もとてもわかりやすく資料がまとめられていると思っております。

その上で健康や安全安心、にぎわいということの価値を数字で出したときに、ご指摘があるようにイベントを開催したため、例えば平岸では滞在時間が23倍ということは、それはそうなるかもしれないですよというお話に対して、そのことがもたらす価値をどう評価するかというときに、一つは「新しいお客さんが増加したというお店が増えた」というところがありうるだろうと思っております。

その上で後半の議論とも繋がってくると思いますが、社会的紐帯と有村先生がおっしゃったように、前回のこの委員会の中で、確か道尾先生だったと思いますが、「偶然出会えること」がパブリックスペースに人が長く居たりすることの価値の一つなのではないかというお話があったかと記憶しております。

北海道的に言えば「出会わさる」のようなことの価値は私自身も札幌にいたときにすごく感じておりました。そういう偶然出会うというアクティビティがどの程度発生したのかがより大きな目的、つまりウォーカブルなまちを実現したときの姿として、街を歩けば昔の同級生や今の同僚に偶然出会う、出会ってしまうみたいなことを価値だと思うのであれば、そういうことをどのように評価していくのかというところが今後の論点としてありうるのかなと思いました。

すみませんもう一点だけ。先ほどのもう一つの議論で協議の難しさについては、例えば、公園とか道路の職員のそれぞれの方が、その都市の文脈を理解する機会というものがそもそもどれだけあるのかというところが一つ大事なのではないかなと思っております。ウォーカブルの委員会で議論するよりも、もしかすると少し大きなレベルの話になってしまうかもしれませんが、その都市でこういう話が起きていて、だからあの公園はこういうふうにしていくことが大事だよねということを理解していただくためには、そもそもそれぞれの公物の管理者の方々にこうした場に参加していただくことがすごく大事だと思っております。

本日も札幌市からそれぞれの課からご参加いただいているということはすごく大事なことだと思いますし、そういった取組を続けていくことに加えて、各地区で行われているプロジェクトにも、より上流から参加してもらうことが、何か一つの可能性なのではないかなと、長期的に考えてもウォーカブルを進めていく上ですごく大事なことなのではないかなと思っております。以上です。

#### ○有村委員長

ありがとうございました。他にいらっしゃいますでしょうか。

#### ○道尾委員

私からもコメントよろしいでしょうか。皆様ご説明ありがとうございました。私の方では実証実験の宮の沢の現地に家族連れで滞在させていただいたということと、それから成果報告会に可能な時間帯で参加をさせていただきました。

今回の実証実験に参加いただいたイベント主催者の皆様は、すごく積極的な方で自分たちの活動についても少しまち作りレベルで還元していくような取組をどの方たちもなさっていたなと思います。一方で、今までも議論が上がっていましたが、そもそも日常の環境としてであるとか、平時の利用に関して、これは都市公園であったり、歩道であったり、沿道施設間の移動であったり、そういったところにこのような実証実験で起きていたアクティビティがどう日常に還元されていくか、また、そこのサポートのようなことを先ほども挙がっていた管理者協議団体に、まず活用の可能性として知っていただくということが何かイベント実施のために許可申請をスムーズにするということだけではなくて、その日常そもそも利用者がいる環境がウォーカブルで札幌らしいであるとか、北国らしいというようなことが出てくると思うので、議論ですとか何かこの委員会ウォーカブルの策定に関して将来性のあることが提言できていくといいのかなと感じています。ありがとうございました。以上です。

#### ○有村委員長

はい、ありがとうございます。泉山さんどうぞよろしくお願いします。

### ○泉山委員

すみません。前回欠席してしまったので、お久しぶりでございます。よろしく申し上げます。私から気になった点は、まず社会実験の方で大変素晴らしい成果がまとまっていると思いますが、健康に関しては歩行者数と歩行者量の増加という数字は良いのですが、健康的な解釈をもう少しまとめていただけると、その数字が何を意味するかというのが分かりやすくなると思います。特に歩行者数などは賑わいの指標でも使えたりしますので、その点が気になりました。それから、交流と賑わいは、そのボックスは良いのですが、できれば分けていただき、賑わいの部分と交流の部分は微妙に違うところがあると思っておりますので、これは事前に設定してなかったのが難しいかもしれませんが、できれば交流の部分は市民と来街者ですとか、市民同士の交流みたいなことがわかると良いと思っております。

また、これは全体的に言えるかもしれませんが、定量的すぎる部分があると思っております。調査員や実験主体の人たちが感じた所感など、少し定性的な質的なものも含まれるとより効果という点で良いと思いました。

あとは、先ほどの話で、社会活動や出会いというところは大事なのですが、一方で住宅地の場合は、特に1人空間みたいなことも大事ではないかと思っておりますので、社会活動が多ければ良いというだけではないと思いました。特に、雪国は外に出ることが億劫にもなりますので。

あとは、パブリックスペース活用の指標的な部分が少し多いなと思っております。拠点間ですとか施設空間同士の繋がりですとか、関連性を持たせるかというところ、可能性みたいなところは今回の実験は割と素早くやるということが重要だったのですが、こちらは今後の課題かと思いました。

あとは、市民報告会のところでのコメントで、ワンストップ窓口ですとかガイドラインの話が少しありますが、公開されているので具体名差し控えますが、あるところではガイドラインを作ったのですが、結局作っただけになってしまっており、実行までうまくいかないところがありました。やはり先ほどもお話をしていた管理者のマインドセットは結構大事であり、通常の道路占用等の考え方で、社会実験と考えられてしまうと「そもそも社会実験だから」というところの理解もありますし、あるいは場所によると思うのですが「ほこみち」といった最新の制度が管理者側には伝わっていないことがあるので、講習のようなものも含め、理解の促進も今後必要かなとは思いました。

以上です。

### ○三谷委員

はい、では三谷も発言してよろしいでしょうか。

### ○有村委員長

お願いします。

### ○三谷委員

どうもありがとうございました。先ほど泉山さんも言われたところに関連してなのですが、この健康の切り口のところ、私も気になりまして、そもそもの目的がウェルネスのところか

ら札幌市のウォーカブルは始まっていると思うのですが、健康が歩行量だけで切り取られているところが少し気になりました。

やはり地域に住まう上での健康というところは、非常に心理的で、地域とどう繋がれているかですとか、その先には共助の仕組みがしっかりあるかとか、そういったところにあるのではないかなと思いますので、健康の指標といいますか、何をもちてウォーカブルが健康を目指すのかといったところをもう少し広げて考えても良いと思います。

もう一つ。実証実験を今年やって非常に盛り上がり、市民の方も行政の方と一緒に公共空間を使っていこう、ウォーカブルを目指していこうという機運ができていると思いますので、この 2 年間でウォーカブルビジョンを作っていく中でのこのムーブメントを逃がさないように、これから動いていただきたいなと思いました。

よくあるのが、実証実験を行ったその後に動きがなく、1 年間、気づいたら市民の方たちからすると、ビジョンがいつの間にかできていたということはよくあつたりしますので、しっかり改めて向き合せて、動いているところがあると思いますので、この後大きな事業というのは無いかなと思いますが、継続的に接点を持って意見交換していくような仕組みですとか、また動きを継続的に市民の方たちが続けていけるようなところというのが、後半の議論でもあると思うのですが、頭に入れながら少しずつ動かしていけると良いと思いました。

同時に、今回、間に管理者としての行政というものもありますし、多分警察との間に入ったりということもあると思うのですが、行政の方もかなり汗をかかれて動かれたところあるのではないかなと思っていて、行政の中の方たちが、どういうことをしてきたのかということをしっかり整理しておくことが重要かなと思います。

市民ワークショップの開催で、ワンストップ窓口が設置できると良いというお話が出ているかと思うのですが、ワンストップ窓口を設置するには、かなり行政側で様々なことを整理したりですとか、窓口立つ職員の方が何をしなければならぬのか、他の部署とどう連携しなければならぬのかという部分を整理していく必要があると思いますので、今年担当された職員の方だけがそのナレッジを持っている状態ではなくて、しっかり型化していくということが今年度の実証実験の振り返りとして非常に重要なところかなと思いますので、ぜひそういったところも取り組んでいただければと思います。以上です。

#### ○有村委員長

ありがとうございました。事務局の方から何かお答えすることはありますか。

#### ○山内プロジェクト担当部長

プロジェクト担当部長の山内でございます。委員の皆様、いろいろご意見ありがとうございました。我々も、今回 3 ヶ所の実証実験を行うにあたって、やはり一番気をつけなければならないのはイベントを目的化してやると、何か乱すのではないかなということ意識しておりまして、あくまで手段として考えて、その先に、やはり心地いい生活空間のまちができ上がるということにどのように繋げていくのかということに常に意識して、地元の方とも協議しながらやってきたつもりであります。

ただやはりその評価の仕方というのはなかなか難しいところがございます、皆様からも定量的な数字の見せ方というのは果たしてどうなのか、特にウォーカブルというものが、単なる身体的健康じゃなくて、各委員も言われていましたけれども、心の充足感といえますか、生活の満足感のような部分にどのように繋がっていき、それがどのように評価できるのかというところが、非常に悩ましいなと感じておりますが、そこを様々関わった人たち、あるいは参加してくれた市民の皆様から何かご意見を取りながら、その結果を定性的に何かお示しできたら、次の取組にまた繋がられるのではないかと。

そういう中でその取組自体のハードルを下げながら効果は少しずつ上げていくということができればいいのかなと考えております。以上でございます。

### ○有村委員長

ありがとうございます。先ほど泉山先生の方から定性的なことも盛り込むというコメントをいただいておりますので、まだ間に合いましたらこちらの方も、資料の方に付け加えていただければと思います。

前半に関しましては、おおよそご意見出揃ったと思いますので、引き続き議事の後半戦につきまして事務局より説明をお願いいたします。

### ○事務局 政策推進課 阿部

はい。有村委員長ありがとうございます。それでは資料 17 ページからまたご説明をさせていただきますと思います。

ここからは庁内の検討状況と中間骨子案についてご説明いたします。第 1 回委員会でもご説明いたしましたが、ウォーカブル施策に関連する多岐にわたる部署を取りまとめ、積極的に推進していくため、副市長を本部長とした推進本部体制を構築しております。具体の検討は、都心、地域交流拠点、住宅市街地、それぞれのプロジェクトチームにわかれ、実務者レベルでの協議を行っております。このプロジェクトチームには、都市計画、交通計画、観光、みどり、景観、交通安全、そして管理部門である道路管理課も交え、分野横断的な議論を進めております。また全プロジェクトチームに共通する冬のウォーカブルという特別テーマに対しては別途ワーキンググループを設置して、冬の札幌の弱みでもあり、強みでもある冬ということに向き合っているところでございます。

こちらは各プロジェクトチームの名前にもなっている都市空間の種別についてのご説明でございます。都心はまさしく中心部であり、札幌のみならず、北海道の中心として、国際競争力を備えた高次の都市機能が集積するエリアでございます。地域交流拠点は、右側の図面ですと、オレンジ色の小さい丸で表現されておりますが、区役所や地下鉄駅周辺などのエリア 17 ヶ所で、人々の交流が生まれ、生活圈域の拠点となるエリアでございます。最後に住宅市街地はかなり広いエリアとなりますが、居住環境の魅力向上や生活利便性の確保を図るエリアというようになってございます。

ここからは各プロジェクトチームの現在の主な取組をご紹介します。都心部では、公園などの広場的な空間や道路空間、地下空間などを柔軟に活用していくことや、交通課題などの解決に向けて実験的な取組を進めております。また右側二つの事例では、まち作りや公共的空間活用を推進する体制を構築して、様々な取組を進めております。一つ一つ

ご紹介すると長くなってしまいますので、必要に応じてお手元の資料をご確認いただけますと幸いです。

次に地域交流拠点プロジェクトチームの紹介です。17ある拠点ごとに特色が異なりますが、地域住民とのウォーカブルな未来ビジョンを作成した宮の沢地区ですとか、駅前の再整備計画にウォーカブル観点を取り入れて検討中の真駒内地区。また再開発事業が完了し、エリアマネジメント団体の自走化に向けて取り組む新札幌地区などがございます。また観光客の受け入れ環境整備の観点は、都心部だけでなく、拠点部においても重要であり、現在検討中である宿泊税の導入に関連してこの使途としても他都市を参考に検討を進めてまいりたいと考えております。また自転車通行空間の整備についても検討が進められており、路面の矢羽根表示だけでなく、道路空間の再配分による通行空間の確保といったところも検討し、その整備計画も今後策定を予定しております。

最後に、住宅市街地プロジェクトチームの現在の主な取組についてご紹介いたします。このプロジェクトチームでは、ウェルネス施策やユニバーサル施策など、全市的なテーマも含めて幅広く取り扱っております。

左上の景観まち作りの観点では、地域が主体となった雪明かりなどの景観活動に助成金を出していたり、現在改定検討中の札幌市景観計画においては、冬の景観や夜間の景観についての取組強化を検討しております。この他にも、通学路の安全確保や地域に身近な公園の再整備など多角的に住宅市街地のウォーカブルを捉えて検討を進めてまいりたいと考えております。ここまででは現時点での取組内容の紹介にとどまっておりますが、プロジェクトチーム内での議論や、資料前半部分でご紹介した実証実験、また市民意見などを考慮して中間骨子案を取りまとめましたので、次のページからご紹介いたします。

こちらが中間骨子案第1章札幌市におけるウォーカブル推進の意義目的でございます。これまでご説明していた課題感、意義に当たる部分を左側に、そして右側にはそれらを踏まえた目的となる目指すまちの姿を五つまとめております。ウェルビーイングやウォーキングなどを包括した歩くことが楽しく健康に暮らせるまち、グリーンインフラやゼロカーボンシティなどを包括した緑とともに暮らす持続可能なまち、ユニバーサルや事故対策、公共交通などを包括した誰もが安心して円滑に移動できるまち、サードプレイスや市民参加、ダイバーシティなどを包括した居心地が良く、自分らしくいられる居場所があるまち、景観や観光、冬のウォーカブルを包括した札幌らしい四季を通じて歩きたくなるまちの五つでございます。非常に幅広いウォーカブル関連施策を五つにまとめていることから、言葉としてはやや薄い表現になってしまっておりますので、今後は市民生活の変化が伝わるような表現に、そして共感が得られるような言葉に変えていきたいと思っております。

以上ここまでが全市的に目指すウォーカブルなまちの姿であります。次のページからは、各都市空間における目指す姿をご説明いたします。

まず始めに、都心部のそれぞれの空間において目指す姿です。こちらは道路空間等、屋外広場空間等、地下空間等、空間ごとに分けており、それぞれについて、目指す姿を何々な風景、シーンとしてまとめております。例えば真ん中の屋外広場空間等であれば、みどりやゆとりが感じられ、来街者の多様な活動が生まれている風景としており、それが全市的に目指す姿の何番に該当しているかというところを、上の米印の部分で示してございます。

本日の論点といたしましては、それぞれの文言についてというところではなく、こういった構成で、このような取りまとめ方の方向性がどうかという点について皆様のご意見をいただけますと幸いです。

次に地域交流拠点それぞれの空間において目指す姿です。道路空間、広場空間以外に特筆すべき特性として、交通結節点機能を持つ拠点部の交通機能について、右側にまとめております。前半部分の実証実験でご紹介した 3 地区はいずれも地域交流拠点ですが、地域の魅力が集積しているからこそ、道路空間では、地域の魅力に触れ、思わず寄り道をするほど歩くことを楽しんでいる風景としております。手法イメージは下に記載しておりますが、この言葉だけでは、どのような要素を集めて目指す姿を達成するのかがわかりにくいというところもございますので、パースをしっかりと具体化していくというところと、各要素についての解説を丁寧に加えることで、わかりやすさを補完していきたいと考えております。

次に住宅市街地、それぞれの空間において目指す姿です。こちらはより日常に近いシーンを意識して作成しております。例えば道路空間等であれば、自然や散歩というキーワードを中心とした風景としておりますし、公園等では、多様な方が自分らしく過ごすという風景を表現しております。特に重点的に捉えているエリアとしましては、学校周辺等があり、通学路の安全化等をウォーカブル施策としても推進していきたいと考えております。

さらに各プロジェクトチームに共通する冬のウォーカブルについても、ワーキンググループ等で検討し、目指す姿を表現しております。こちらのみイメージしやすいように写真をつけておりますが、広場等であれば雪に親しみ、様々なアクティビティを多世代で楽しんでいる風景、道路空間等では雪に映える演出等で人の息遣いと温かみを感じながら、寄り添って歩いている風景を作りたいと考えております。また左下の屋内滞留空間等では、民間開発事業に合わせた良質なオープンスペース創出により、誰もが自由に過ごしている風景としております。最後に右下の地下施設等では、天候を気にせず歩くことができる空間で、歩行速度を下げていくようなそういった風景を目指していきたいと考えております。来週 17 日火曜日には、世界冬の都市市長会議において、積雪寒冷都市の都市開発をテーマに、冬のウォーカブルに関する議論というところも予定しておりますので、今後さらに検討を深めてまいりたいと考えております。以上が、かつて都市空間等の目指す姿についてのご説明です。

ここからは第 3 章、札幌ウォーカブル推進に資する効果的な手法やモデルケースの紹介についてとなります。左側が効果的な手法の記載例ですが、この他にも複数の効果的な手法を整理して記載したいと考えております。こちらは様々な立場の方に、ガイドライン的にお読みいただき、それぞれの立場に応じて活用できる手法を選択していただけたらとの思いで紹介するものです。現在、イメージとして記載している二つは、活用系と整備系ということで、異なる事例を出しておりますが、いずれも目指す姿のどこに繋がるか、有効な場所はどこか、また誰が担うべきか、というところも整理したいと考えております。新規性のある手法以外にも、これまで地域で既に取組まれているような活動にも着目して、改めて整理して記載したいと考えております。そしてこれらの効果的な手法を組み合わせると、画面右側のようなモデルケースになりますというようなご紹介を 3 ケース程度したいと考えておまして、本日は北 3 条広場の事例を記載しております。道路の広場化や歴史的建造物を生かした空間形成、また活用事例としては、今年の夏に初開催したバスケットボ

ールなど、誰もがわかりやすい事例を紹介することで、この札幌の目指す札幌ウォーカーブルへの納得感を作りたいと考えております。

最後に第 4 章、官民それぞれの役割を整理した推進体制や支援策の方向性についてでございます。こちらはあくまで現時点でのイメージとなってしまいますが、左側に産学官民それぞれの役割を記載し明確化しております。地域住民については、実証実験で行っていた主体的な空間活用を積極的に行っていただき、民間企業においては、活用だけでなく、空間マネジメントの一層の推進を図っていただきたいと考えております。また、大学等には、研究開発の観点からご協力をいただくとともに、札幌では特に高校生もまち作りに参加して、都市を教育の場として使いこなす事例というところもまたできてきておりますので、この観点を記載しております。

そして我々行政は、ビジョン策定後の推進計画の策定や計画的なハード整備はもちろんのこと、支援制度の構築運用、さらには積極的な規制緩和というところも考えられるかと思っております。またどれだけ素晴らしいビジョンが仮にできたとしても、本当に推進が図られるかというところは別の話というところですので、明確な推進フローを検討し、ビジョンにそれを記載していくということも重要ではないかと考えております。そして画面右側に記載しておりますのは、ハードソフトだけではなく、やはりその空間を持続的に活用していく空間マネジメントの観点が非常に重要だと感じておりますので、その思いを図にしております。

こちらが最後のページになりますが、支援策の方向性につきましては、先ほどご説明したマネジメントの観点が重要ということで、右下に担い手の育成という軸を記載させていただきました。そして左下が手続きや許認可関係ということで市民ワークショップでもご意見をいただいております、活用ガイドラインの作成や、ワンストップ窓口という点を記載しております。そして上には整理と活用の観点ということで、土地利用計画の誘導制度や各種助成金を活用した支援というところもあるのではないかと考えております。以上これらは現時点で市民意見や他都市事例を参考に記載したイメージではありますが、ご意見ありましたらぜひお願いしたいと考えております。私からの説明は以上ですが本日欠席の大藪委員から事前に欠席コメントを 2 点いただいておりますので、そちらを紹介して終わらせていただきたいと思います。

資料 22 ページをお願いいたします。2 点ご意見いただいておりますが、1 点目はこちらの札幌市が目指すウォーカーブルのまちの姿についてです。目指すまちの姿が五つありますがそれらを 1 枚にまとめたパースがあると、都心、拠点、住宅市街地の風景というところにスムーズに繋がるのではないかと。そういったご意見をいただいております。2 点目も同じく資料 22 ページですが、ご意見といたしましては、札幌市がどんなウォーカーブルシティを目指すのか、わかりやすいキャッチフレーズのような形で市民にも明確に示していく必要があるのではないかとというご意見をいただきました。この五つのまちの姿の上にそれらをまとめた一つの言葉として表現する必要があるのではないかと、またその絵、パースがあるといいのではないかとというご意見だと認識しています。事務局といたしましてはこの意見に大きく賛同するとともに本日の議論を踏まえて適切に対応してまいりたいと考えております。

欠席者コメントの紹介は以上です。進行は有村委員長へお返しいたします。

## ○有村委員長

ありがとうございました。それではただいまご説明がありました。都心、地域交流拠点、住宅市街地プロジェクトチームの検討状況と、札幌市ウォーカブルビジョン中間骨子案につきまして、委員の皆様よりご質問ご意見等ございませんでしょうか。

## ○山崎委員

それではよろしいでしょうか。ご説明ありがとうございました。

まず全体としてこちらもありやすく、個人的には手法をカタログ化するという部分はすごく良いアイデアだと思っております。コメントとしては 2 点ございます。1 点目は大藪さんのご意見と同じビジョンのところについてです。

阿部さんもお説明のときにおっしゃっていたかと思いますが、ビジョンの三つの意義から五つの姿に行くにあたって、それほどこのビジョンというものが具体化されておらず、かつ抽象化されているわけでもないかなと思います。

同じぐらいの抽象度でフレーズが並んでしまっていて、五つに整理するということのメリットが小さくなってしまっているのではないかと思います。ウォーカブルビジョンがビジョンであって、そもそも共感をする人を増やすとかこの活動が良いと思ってくれる人を増やすということが重要なのだとすると、このまちの姿のところでは、ウォーカブルという言葉も、別に一般用語ではないと思いますが、この町に住む人がウォーカブルなまちになった暁にはどんな生活を享受することができるのか、というそのビジョンを見ることができるといことが大事なのではないかと思います。先ほどの泉山さんの話に基づけば、集まれる場所にもなりうるし 1 人にもなれるということ価値として訴求するとか、前回から重要なかなと思っているのは町を歩けば「お久しぶりです」といった出会いがあるですとか、そういったどういう町の姿になるのかということ記述するものとして位置付ける方が望ましいのではないかと思います。

2 点目は施策を列挙されているページが 26、7、8 ぐらいにあったと思うのですが、これがまず良い点としてはウォーカブルというものがそもそも何かキラー政策 1 個を実現すれば、それでよしというのではなく、様々なことの組み合わせでやっていかなければならないですねという点はすごく同意するところですし、かつここに挙げているものが必ずしもウォーカビリティを上げるためにやっているものではなかったとしても結果としてウォーカビリティを上げる施策をリストアップしているというのは良い点かと思えます。

もう一步踏み込むとすると、今までウォーカブルを目的にしていなかった施策たちをウォーカブルという視点からどう施策誘導していくか、施策をよりウォーカブルを上げる点に誘導していくかという点が大事なのではないかという点が一つで、もう一つはせっかく市民参加のプロセスをこの検討の中で取り組んでおりますので、その市民の人たちが自分はこの場所にウォーカビリティの高さを感じるということがどういう施策と結びついているかということを通じて、意外とこの施策がウォーカビリティに繋がっていたのかという評価をその市民の意見からするってということが大事なのではないかなと思っております。

難しいことだとは思いますが、せつかく市民参加に積極的に取り組まれているということもあるので、市民がどういう空間にウォーカビリティを感じているかということをもう少し紐解いていく作業っていうのがあってもいいのかなと思ったところです。以上です。

### ○有村委員長

ありがとうございます。他にご質問ご意見ございますか。

### ○道尾委員

道尾です。よろしくお願いいたします。いくつか観点はあるのですがまず 2 章のところの都心、地域交流拠点、住宅市街地のところで、そのスライドの中でそれぞれの今の各項目についてお伝えしたいと思います。都心にあたってはこれまでも様々なインフラの整備もありますし、アクティビティの実践もあるかと思いますが、スライドの中の要望の追記として、民間の公開空地の作成の話や歩道上空地も既に積極的にウォーカブルであるとか、歩道の拡幅であるとかそういうところに働きかけているところを実績として明記するということが必要ではないかなと思います。

それに加えて、地下空間に関しては、地下歩行空間、札幌駅から大通間の確保というのは素晴らしいものだと思うのですが、そこから大通間で言えば創成イースト側の地下空間に関しては、ギャラリーの部分だけではなくて、駅コンコースとしての地下の空間獲得で実際に創成東エリアの保育施設の散歩などに活用されています。それから西 18 丁目方面もそうなのですが、別に駅同士を繋がなくとも駅に長い地下通路があることによってそこが冬の期間や夏場暑い時間帯の園児のお散歩の空間にも既に活用されているので、そのような交通施設のインフラ整備に関しても、ウォーカブルに貢献するという事は示せると思います。ただし、これがイベント実施等になると札幌市の交通局との兼ね合いで諸々のイベント利用ということではできませんし、例えば写真画像として何か記念撮影をしても良いですなどといった市民一般のレベルの憩いの場としても制約が結構多いということもあると思うので、このようなところが関係者協議であるとか、駅利用の人ではなくても駅のコンコース等を使った健康活動等が推奨されるような空気作りということができればと感じています。いくつかあるのでこのままよろしいでしょうか。

次に地域交流拠点に関してなのですが、先ほどエリアマネジメント団体の見込みが立つというか、そういう人たちが育ってきているということはとても素晴らしいことだと思います。先ほど三つの地区名が挙がっていたのですが、私としては今、札幌市のその拠点にまつわるところでは、手稲エリア、琴似エリア、苗穂エリアこの三つに関しては、もう既に実践的なウォーカブルの取組や施設間連携というものが都市再開発の実践のレベルで高度にかなっている、高水準に達していると感じています。その理由の一つは空中歩廊。これが実現しているということ、それに伴って連携協議会がきちんと地区内で整備されています。このような既に活動されている方々をウォーカブルの中の実践者として今後紹介していくというのも札幌市の中で既に行っている施策ですので、強力なツールになると思います。

それから地域包括ケアシステムです。先ほどからウェルネスのお話が上がっているときに、行政が動くまでもなく、地域の大学や医療機関の方で連携の活動が既にいくつも起こっています。特に私は今、手稲拠点の大学にいますが、昨年度というより、これまでも、ウォーカブル的なものや健康活動に対して駅周辺を利用するというところを継続しています

ので、草の根的に、地域レベルで小さくやっていることも吸い上げていくということが札幌市中で広がっていくということもイメージがあるのではないかと思います。大型商業施設の中を歩くということに関しても、これは交流拠点だけではなく、住宅市街地の中でも、冬の健康活動に大きく貢献していることだと思いますので、そういった既にある民間の活動についても、カタログをもし作るのであれば、事例紹介的に少しでも掲載したほうが良いと感じております。

最後に住宅市街地に関してなのですが、先ほどのウェルネス施策やユニバーサル施策の方に強く接続があるということは本当に素晴らしい話だと思います。特に通学路の話です。スクールゾーンとの連携というものは今学校周りで起こっている子どもたちへの教育に関するところでは、子どもたちが楽しく遊ぶ、移動するというよりも道路や車がいかに危険なものかという語り口の方が強いと思います。それは子どもたちの価値観の中に、道路で遊ぶことは怖いであるとか児童会館や近くの公園へ移動するときにも、どちらかという危険なバリアを超えてまで公園に行くというような、極端な言い方ですがそういう印象操作になってしまっていると思います。そのときに徒歩圏という言葉を思い返すと、小さな子どもや小学生というのは300m圏ということであるとか、一般的な都市生活の中でも徒歩圏800mの話もありますし、もっと歩いて緑道ですとか、様々な札幌市内のグリーン資源を使って移動していくということも、やはり健康活動ではそれをやりたい人もいると思っています。その300、800、それ以上となったときも札幌市のまち作りとして、それが叶っているというのは一つ距離的な、エリア的な指標にもなると思いますので、それがまずお伝えしたいところです。以上です。

#### ○有村委員長

はい、ありがとうございました。

#### ○三谷委員

では三谷よろしいでしょうか。先ほどの道尾先生のお話とも絡めてお話したいと思うのですが、市民活動をされている方たちのお話で、既にある活動のお話もあったかと思えます。

特にその地域交流拠点ですとか住宅地については、公共空間を活用されている団体の方ですとかそういった形を想定されていると思うのですが、庁内のプロジェクトチームを見てみると、そういった市民活動を担当されている文化局の部署の方が入っていないのかなと思いましたが、こちらの現状教えていただければと思いますがいかがでしょうか。入っていらっしゃいますか。

#### ○事務局 政策推進課 阿部

事務局の阿部です。ページで言いますと、17ページになるかと思えます。今、三谷委員からご指摘のありました、まさに市民活動を所管しているような部署、札幌市でいうと市民自治推進室というところがございます、町内会の関係ですとか、そういったところをやっておりますが、実はその課はこのプロジェクトチームには入っておりません。

非常に幅広い、ウォークアブルの範囲があるので、例えばそれ以外にも商店街の関係ですとか、環境施策ですとかが入っていないところもあるのですが、必ずしもプロジェクトチームに入っていないなくても、連携を取って、内容について協議をするということは行っているところがございます。

そうは言っても市民自治推進室とは、まだあまり連携を取れてないというのが実情なので、本日のご指摘も踏まえて、どういったところで連携ができるかですとか、お互いの課題感というところも共有しながら進めていきたいと考えております。

### ○三谷委員

ご回答ありがとうございます。各都心ですとか交流拠点、住宅市街地でマネジメント主体のイメージが異なると思いますので、そのあたりをしっかりとイメージしながら関連する課を巻き込んでいただき、逆に増えすぎていくと議論が難しくなる場所もあると思いますので、情報共有をしっかりと水面下でしていくとか、そういったことも話していただければと思います。

そういった観点も重要と思ったのは、市民団体の方たちはウォークブルのために公共空間を使うというよりも、自分たちの暮らしの活動の中で、公共空間ですとか、街中で使える空間があるということで、使ってくださいと思いますので、そのあたりの意識を共有できれば良いと思いました。

もう一点よろしいでしょうか。23 ページからの第 2 章の札幌ウォークブルの目指す姿の部分です。今のこの三つの「道路」「広場」「地下空間」というところで、各シーンで切り取っていただいて整理してもらっていると思うのですが、これは少しわかりにくいと正直思いました。拠点ごとの特徴を生かした、三つのエリアの特性を活かしたウォークブル像というのが少し見えにくいなというように思いますので、もう少し俯瞰して全体をというお話も先ほどありましたが、この都心ですとか地域交流拠点ですとかというような全体で見せる絵と各エリアで見せるという絵が 1 枚あった方が市民の方にも伝わりやすいものになるのではないかと思います。以上です。

### ○有村委員長

ありがとうございます。他ご意見ございませんでしょうか。泉山先生お願いします。

### ○泉山委員

すみません、5 点ぐらいあるので長くなるかもしれませんが、まず 22 ページの話は、絵も大事ですが、文言については、おそらくカタカナを使用しないようにしたと思いますが、少し凡庸な言葉になってしまうので、多少カタカナを含んでもよいと思います。また、札幌ならではの言葉ですとか固有名詞などがもう少し入っても良いと思いました。

前橋では「めぐく。」という言葉を使っており、方言ではなくても良いですが、どこでも言えそうな感じになっているところをもっとアップデートできると良いと思いました。それから都心と交流拠点と住宅地のところですが、各ページに三つの空間カテゴリーごとに目指す姿となっているので、三つの上位の概念として何を指すかというところはあっても良いと思います。最初にもありますが、逆に最初のものだと少し短すぎると思います。地域交流拠点や住宅地だと、やはり姉妹都市のポートランドの 20 分圏ネイバーフッドのタウンセンターの考え方などをもう少し参照していただいた方が良いと思っていて、公共交通拠点がなく中でどうやって中心部を作るかというところがあります。また、住宅地も住環境の整備ということの考え方をアップデートする必要があり、テレワークやコワーキング、子どもの遊び場など様々あると思いますが、屋外公共空間だけではないと思いますので、そのような話も入ると良いと思いました。

冬のウォークブルについてですが、私はずっと言っていますが、やはり積雪したときの雪山のある道路空間を、残りの半年分の暖かい時期をどう使うかという問題があり、私は車道の空間を「カーブサイドマネジメント」と国でも言っており、パークレットやキッチンカーを呼ぶなどでも良いですが、冬のウォークブルというのは冬だけではなくて、冬に使われる空間を夏にもどのように使えるかという話にもなると思いますので、そのようなことも加えていただいて良いのではと思いました。ただし、雪山に埋もれるので、劣化しない仕様ということが前提になると思います。

それから、制度のところではバスキング制度などを挙げていますが、ぜひそういった取組ができると思うています。日本の課題は、国が法制度を作ってそれを全国の自治体を使うという形になっていますが、海外は自治体が自分で制度を作るという形になっており、札幌市にも独自の必要なものを作って発明していくと良いと思っています。なぜバスキング制度が良いかという、道路占用というのは道路で何でもありだが何でもはできないという実態になっており、海外のように目的別の許可制度をどんどん作っていくべきだと思います。それが札幌市の自治体規模のスケールだと可能だと思います。オープンカフェの許可やマルシェの許可、パンフレットの許可など、その場合のガイドラインや安全基準ということもセットであれば、新法上これだったらできるなど、そこまで行けば道路管理者も位置づけが明確になるので、許可しやすくなると思ひまして、その先はほこみちや道路占用特例などツールは揃っているのです、そのようなことまでやれると、札幌市は全国の事例になると思ひました。

最後に担い手育成の部分で、エリアマネジメント団体の話がありますが、最近のエリアマネジメント団体は事業体のイメージになってきているので、スタートアップ的に事業でやっても良いですが、エリアプラットフォームという話も大事だと思いますので、林委員などが取組んでいる、様々なチームを作ったり、議論していくという場から始まる、そういったところも大事にした方が良く思ひました。以上です。

## ○有村委員

はい、ありがとうございます。他ご意見、林さん何かございますか。

## ○林委員

ありがとうございます。私は個人的にバスキング制度に挑戦したいというところで、この夏も高校生の企画で、大通公園で実験的にバスキング制度のようなものをやらせていただいたのですが、すごく良い雰囲気になりました。音楽が流れていて、それがルールの下で行われているというところで、実験的な企画ではありましたが、その場所に何がふさわしい音がしっかりと審査を経て、札幌ならではの音楽業界の方々も、一緒にスキームを考えてくれそうなどころまではいけそうですので、本気でやっても良いと思ひています。

あとは 17 ページのところ、このビジョンが実現するときのフローについて、その辺りもすごく大事だと思ひて聞いていました。28 ページに、推進フローのことも少し書いていただいていると思ひます。左側の図の「官」のところですが、推進フローの明確さ、ここをビジョンに載せていくことがすごく大事だと思ひています。泉山委員のご意見もお聞きしたいのですが、何か他に事例があるのかどうか、ビジョンだけ絵に描いた餅ではなくそのビジョンを機能させていく仕組みがしっかりとあるビジョンというのが、他にあると良いと思ひました。前半の話にも結びつきますが、平岸でやろうとしても、管理部局との協議でそれなりに大変になってくるということはよくあることだと思ひます。

三谷委員からもありましたが、ウォークブルを目的化するのではなく、手段として、各部署の課せられたミッションを達成できると、とても良いと思っていまして、これは結構高度な庁内協議になっていくと思います。場所や、道路を使わせてくださいというところだけではなく、何を狙っているのかというところがすり合っていないと、許認可には行き着かないと思います。

例えば、公園を活用するとなった場合には、一番現場に近いところだと土木センターがいて、まずはその部署とみどりの管理課がちゃんと話すことも大事ですし、その手前には政策局の方々とみどりの方が話すというフローもあるかもしれないですし、事業者はどの時点で誰とやり取りしたら良いのかですとか、そういうフローが明確になって、行政の職員さんも異動があるので、人が変わっても機能し続けるフロー図があると良いと思いましたが泉山委員、どう思いましたか。

### ○泉山委員

ありがとうございます。今私の学生も研究していますが、例えばほこみちなども計画が無い状態でやる場合がありますので、どうやって行政が説明とか根拠にできる位置づけを設定するかというのが大事であり、例えば都市マスに～軸と書いています、とかそのようなレベルが根拠になるケースもあると思うのですが、そのようなケースはなかなか書きにくいところがあると思います。一番ライトな方法は都市再整備計画を作ってそこに何でも必要なものをエリアごとにしっかりと位置付けることで、道路管理者ですとかそれぞれの部署さんの根拠にする方法があると思います。

ただし補助事業やハード整備がないと行政が整備計画などを作りにくくなってしまいますので、エリアプラットフォームですとかエリアビジョンをしっかりとその地域の公民で作って、それをもとに整備計画を提案するという方法もあると思います。どのようにして計画的な根拠を各地で作っていくのか、行政施策に載っているハード事業があれば整備計画をパッと作るということが出来ますし、それがなければ、民間や地域からビジョンを作って、そのビジョンを作るときに行政も一緒に入ることによってそれを根拠に整備計画に持っていくということにしていく方法が現段階のツールだとやりやすい手法だと思います。

### ○林委員

確かにそういう計画もので担保するということはありそうですね。加えて 17 ページのプロジェクトチームがすごく落ちてくると思うので、こちらを動かしつつ、コミュニケーションを取り続けるということも合わせ技でいくとすごく良いと思いました。

もう一点ですが、23 ページのちょっと単純なところになりますが、記載の仕方が良いという感想なのですが、「〇〇している風景」ですとか、そのような語尾です。私もいろいろドローイングでビジョン図を書くときにはやはりシーンを書くようにしています。

賑わいの定性ですとかなんとかの推進という手法論になってしまうと、手法はいろいろあると思うので、まずは何か目指したい・描きたいシーン、風景をみんなで共有するところが、非常に重要だと思います。

その先に様々な手段や手法はみんなで考えて行けば良いと思いましたが、この書き方は良いというところですか。最後に、それに関連して山崎委員にお聞きしたいのですが、単純な質問ですが、「なんか久しぶりだね」という出会いはどうやって生まれるのか、もう少

し解像度をあげたいと思うのですが、どうやったらその関係、コミュニケーションが生まれると思いますか。

### ○山崎委員

ありがとうございます。「住めば住むほど住みやすくなる」ということは、結構良いと思っ  
ていまして、札幌に単身赴任で来たばかりのときは雪すごくあり、このような町で 1 人で  
過ごしていけるのだろうかと思いつつ、住むごとに知り合いが増えていって、その人たち  
と偶然の出会いがあって「雪かきどうしている？」というようなお話がそういう場で行われ  
るみたいなことがあり得るとして、そういう場がどう生まれるかと考えるときに、札幌  
は都心と拠点と住宅という 3 レイヤーがあって、それぞれに「久しぶり度」のようなものが  
結構違うのではないかと考えています。

自分は 6 歳ぐらいから 25 歳ぐらいまで札幌に住んでいましたが、25 歳のときが一番札  
幌に知り合いが多い状態だったと思います。拠点的な場所に行けば小学校の同級生など  
に久しぶりに会ったりするということがありますが、滞在時間が長かったり、そこをただ通  
り過ぎるだけだと確率的に出会う、久しぶりだと思うことは少ないと思います。

このため、できるだけ今ある場所に様々な目的の人が滞留できるということが大事だと思  
っています。それは拠点においても都心においても大事かと思っており、ここからは議  
論となりますが、多様であればあるほど良いのかというのは、議論があって良いと思っ  
ていまして、なぜなら、久しぶりに会うということは、例えば自分であれば同世代の人と久し  
ぶりに会いやすいため、ある程度クラスターや属性によって集まる空間が違った方がむし  
ろ久しぶりに会いやすいということはあるのではないかと思います。そして、これまで  
公共空間は様々な人が使った方がいいと思っていたけど、実は特定の世代や特定の思考  
を持った人が集まる場を沢山作るということの方が、いわゆる「お久しぶりティ」が上が  
っていくと思います。

### ○林委員

ありがとうございます。ぜひ評価指標に「お久しぶりティ」を入れていただきたいと思いま  
すが、三谷さんにもお聞きしたいのですが、偶発的な出会いを作り出すのが難しく、大  
通公園でも毎年チャレンジしていますが、なにか良い方法がありませんか。現在まなびま  
くり社というプログラムで、毎年大通公園で実証実験をやらせていただいていると、卒業  
生が来てくれます。高校生が行っていて、前のまなびまくり社の生徒や、大学生になった  
人が来て、「後輩やってるね」「私はこんなことやったんだよ」といったコミュニケーションも  
生まれますし、それは縦の繋がりが仕組みとしてできており、きっかけがあるからなので  
仕組まれた偶発的なコミュニケーションかもしれません。あとは先ほどのバスキングで高  
校生が何か楽器を弾いて良いですよというコーナーを運営していると、本当に関係ない  
人が楽器を弾きにに来てくれて、「私は高校生の頃にベースをやっていた」とか、本当に他愛  
のない会話が生まれていて。普段大通公園はあまり会話がな場所ですが、サラリーマン  
がお弁当を食べているような雰囲気の場合に何かちょっとした仕掛けを加えるとコミュニ  
ケーションが生まれるということがあるのではないかと思います。そういったイメージで  
何かこれをやってみたら面白い、といったことはありますか。

### ○三谷委員

そうですね。いい打ち返しができるかわかりませんが、例えば、私は以前、別の場所で社会

実験を行ったときに、ロングテーブルを置きました。ロングテーブルは結構偶発的な出会いを誘発すると思っていて、必ずテーブルをシェアしたりしますよね。

そこでまさに、仕事帰りのおじさんと女子高生が会話をしたりということが盛り上がりまして、それが良いと捉えるか悪いと捉えるかということはあると思いますが、そのようなシェアできるものを、例えばファニチャーみたいなものでも良いかもしれませんが、そういう場を作るという、あえてそういう行為をするようなものを置くということもあるかと思ひますし、今みたいにそのプログラムをベースにして、突発的に参加できるプログラムを作るというのもあり得ると思ひました。

### ○林委員

確かに、ありがとうございます。やはり都心と地域交流拠点と住宅地とまた全然違う中で何か偶発的な出会いと「お久しビリティ」のようなものの差をつけながらやっていくかもしれないですね。ロングテーブルはどこでもできそうな気がします。

### ○三谷委員

意外と有効なのではないかなという気がしています。絶対隣の人に「ちょっといいですか」ですとかそういう話になりやすいです。子どももすごくかわいがってもらえたりするので、演台とかロングテーブルは、偶発的なコミュニケーションが生まれやすいツールだと思います。

### ○林委員

ありがとうございます。園児との散歩もすごくたくさんコミュニケーションが生まれやすいですね。

### ○道尾委員

それで1個思い出しましたが、27ページ、スライド上でモデルケースの紹介として北3条広場、今のそのコミュニティとか偶発性を生み出すときの話に繋がるかと思いますが、ここにアクセスするときには地上交差点の部分の信号が、要はクロスになっていて、札幌の街の中はそのような歩道の渡り方がいくつかあると思ひます。

あれは人の偶発性ですとか人が公共的な空間に流れていくということをちゃんと後押ししている明確な手法だと思って聞いておりました、ウォークアブルに関してもそのような交通規制と道路構造上の話と広場が公共空間であって、地下や沿道建物からもそのシンボルの道庁を目指して人が回遊していくといったところで、すごく象徴的な場所だなと思ひ出しました。このため、北3条広場がモデルケースであがっているということは単に100m区間についての空間整備だけではなく、そこにアクセスする人の流れが、今まで委員の方がお話ししていたことの偶発性とか「お久しビリティ」みたいなところに関してバリエーションをもたらしているという事例で良いと思ひましたが、27ページのイメージ紹介をする際に、接続するところまでが語られるとすごく良いと思ひます。

あともう一つは、北3条広場は「アカプラ」という愛称があります。札幌らしい呼び名の付け方やフレーズの用い方みたいなものがあるときに、モデルケースの紹介のときに「アカプラ」という、市民公募でみんなが呼ぶ、何か呼び名がある場所というのが、ウォークアブルやコミュニケーションを創発するというにはあるかもしれない

で、このビジョンの中にもそれを積極的に、場所の固有名称を愛称というものをを用いていくという表現の仕方も良さそうです。園児のお散歩でも目的地やこの前を歩いていこうとしたときに、場所の名前がオリジナルで呼ばれていて、それもとてども日常かつ文化的なことだと思うのでそういったことがあると、楽しいと思います。

### ○有村委員長

ありがとうございます。久しぶりに進行が私の方に戻ってきました。いろんな言葉が出てきたのですが、今の議論は面白かったのですが、「お久しビリティ」はそのままでの言葉ではちょっと載せづらいのかもしれませんが、意味合いは皆さんよくわかると思っています。

セレンディピティですとか、そういった言葉が今でも使われていると思いますが、新しい発見が出てくるといった部分がフィジカルな物理世界で出てくると良いと思うんですね。空間軸で今回いろいろと住宅市街地が出ていますが、SNS のような言語空間のようなものも我々はすごく使いこなして、そこの中では「お久しビリティ」といったものもすごく出ています。すごく簡単に人と出会っていきませんが、やはり対面で会わなくてはならないコミュニケーションというものもあって、そういった機能をどのように都市の中に埋め込んでいくべきなのかというところが今の議論になっているのだと思います。

そこで私の意見なのですが、17 ページや 18 ページで札幌の地図が出ているのですが、意見のまとめ方が、今話した通り空間の階層性の中で議論が進んでいて、その施策集になっているようなイメージを持っています。

都心と地域交流拠点と住宅地、これを市民目線で戻していったときに、移動の総量がすごく大きいものは、平日の通勤になります。それを皆さんは車で移動するので、結局ドアトゥドアで、移動中には「お久しビリティ」が出てこないことになり、あまりいいことがないのです。ですが、徒歩・公共交通や、都心の地下歩行空間というところで、たまたま人と会うですとか、車ではないので帰りの飲み会でたまたま人と会うとか、同じ嗜好で同じレストランに来ていたとかで嬉しいなど、そういった一連の交通行動の中で市民の移動体験でまとめた図が後ろの方の 25 ページや 24 ページのイメージパースに、施設ごとや空間ごとでまとめていると思います。ここに、朝例えば出勤して、歩いてバスに乗って、それで地域拠点や都心に行き、札幌は完全にモノセントリックですので、新札幌とかがありますけれども、大体は中央区の方に向かっている流れがありますので、そのときに公園や道路空間がこのように変わったときに、ビフォーアフターでこのように変わっていきますよという絵があると、個人的にはすごくわかりやすいと思います。

それで、熊本市の今の移動のビジョン、移動戦略を見ていると、はっきり例えば車を 1 割削減・渋滞は半減させて、公共交通 2 倍にしましょうと言っています。これは一つ定量的な値にはなっていますが、裏を返すと、車利用の方々を徒歩側や公共交通のようないわゆるソフトモード側に引き込み、更に魅力を向上させていくということを戦略として取ろうとするわけですので、ほぼウォーカブルというところだけでまとめて空間でまとめるとういうイメージパースになると思いますが、体験する側の認知の絵があると、朝 8 時ぐらいにバスに乗って、9 時ぐらいには着いていて、お昼ご飯を近くの公園で食べていたらバスキングになっており、こういったことでも市民の生活レベルが上がっていますということが見えてくることがあると良いと思い聞いていました。

ということで、プロジェクトチームが、17 ページで、都心と地域交流拠点と住宅市街地に

わかれています。道路交通計画課なのか公共交通システム担当などが、これを横軸で結んでいき、徒歩プラス、公共交通のところの連携のところを少し厚めにもう一度見直していただくと、また新しい視点での議論ができると思って聞いていました。以上です。

#### ○有村委員長

いろいろ議論が出ていてそれぞれ皆さんの立場ですとか専門の分野からのご意見がたくさん出て、すごく多角的な意見が出た非常に良いディスカッションの時間になったと思っております。他ご意見ございますか。この後半の議題に関しまして、いろいろあったと思いますが大丈夫ですか。

#### ○道尾委員

今、有村先生にお話いただいた内容本当にとっても良いと思ひましてぜひ一言。今も研究ゼミの中でアクティビティ調査を行うときに、シーンで認知していくという人は、その行動を通して体験していくという、そこで共感が得られ、それにこういうビジョンの資料に関しても作成していくということがあれば、何か止まった局所的なということではなく流れていくものの表現がととても豊かになるなと思ひ、大変素晴らしいコメントだと思ひました。ありがとうございます。

#### ○有村委員長

ありがとうございます。よく観光で使われている、カスタマージャーニーマップというものがあります。カスタマージャーニーマップの手法で、あそこまで細かいものを描く必要はないと思ひますが、ビフォーアフターで、ウォークブル施策を取ったときとそうではないときで、市民の移動がこれだけ変わってきます、知らない人たちも出会ったりします、「お久しぶり」が高いですと言ったことが分かる良いと思ひます。「お久しぶり」を使いたくてたまらないです。

#### ○山崎委員

林さんにいいふりをいただきました。ありがとうございます。追い詰められて出てきたみたいな感じですね。

#### ○有村委員長

いろいろありそうですね、この「～ぶり」はたくさんあると思ひますが、そのようなところをうまく表現するものがあつた方が市民への説明にも使えると思ひ聞いておりました。ありがとうございます。他にご意見ございませんでしょうか。まだ委員会の時間としてはまだもう少し時間確保されていますけども、よろしいですか。

はい。特にないということですので、一通り皆様からはご意見が出揃つたということで、このあたりで意見交換を終わらせていただきます。皆様スムーズな議事進行へのご協力に感謝申し上げます。

事務局におきましては、ディスカッションで出た意見について、可能な限りご対応をご検討いただきたいと思います。それではここで進行を事務局にお戻ししたいと思います。よろしくお願ひいたします。

### 4.閉会

#### ○児玉政策推進課長

有村委員長本日議事進行誠にありがとうございます。

また委員の皆さんの交流も、すごく深まったと思ひまして、今日はいいい会だったと思ひます。ありがとうございます。事務局といたしましては令和7年度末「(仮称)札幌市ウォーカブルビジョン」策定に向けまして、本日いただいた意見を踏まえながら検討を進めまして、次回の第3回検討委員会では骨子案のご報告をしたいと考えております。

次回の開催は来年3月頃を予定しております。また委員の皆様への日程調整のご連絡をさせていただきますのでよろしくお願いいたします。オンラインで視聴されている皆様におかれましては、最後までご参加いただき、誠にありがとうございました。

札幌市の取組についてご質問等ございましたら、札幌市公式ホームページウォーカブルシティの推進の問い合わせフォームよりご連絡いただければと思ひます。なお本日の資料につきましては、後日ホームページに掲載予定でございます。

以上をもちまして本日の委員会終了させていただきます。本日は誠にありがとうございました。次回もよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

以 上